

技術家庭科学習過程分析による一考察

—被服教材の指導にあたって—

金 田 ト シ 子

I 研究目的

被服教材の実習指導を通して、基礎的技術の習得と一つのを製作してその喜びを味わわせ、また限られた時間に指導しなければならないということは教師にとって大きな悩みの一つであります。そこで今年生徒にとって一番関心の薄い女物ひとえ長着の製作をとりあげ、どうすれば生徒と教師、生徒と生徒の間がうまくゆき、興味がわきよりよい指導が出来るかを学習の進展にともない生徒1人1人の誤り方についてその誤りを記録整理し、その原因とそうした誤りの解決法を見出そうとこころみだ。

II 研究方法

名簿の順に2人ずつの組を作らせ、一つの事が出来ると互に誤りがなかったかたしかめ記録帳につけさせ、また途中でわからなくなった時も教えてもらったことも同時につけさせる方法をとった。

- (1) 人員……2年生女子44名
- (2) 時間……講義6時間・部分縫い1時間・実習20時間・テスト1時間計28時間

(3) 指導順序

講義	紙布	実物	テスト
裁ち方	裁ち方	裁ち方	裁ち方
しるしつけ	しるしつけ	しるしつけ	
縫い方	部分縫い	縫い方	縫い方

III 結果の考察

(1) 1. 講義

記録帳とノートにより誤りがなかったかたしかめた結果、布の構成がよくわからない、出来上がった時の型と一致しないことがわかったので、紙布で裁ち方としるしつけをし、のりばりて出来上りの型にし、実際の時の誤りを少くしようとした。

2. 紙布

	誤りの人数
裁ち方	10名
しるしつけ	7名

実物の $\frac{1}{4}$ で紙の反物を作らせ、実際に裁つ場合、しるしつけをする場

合に誤りがなかったかやらしてみた。

3. 実物

	誤りの人数
しるしつけ	25名
縫い方	38名

裁ち方が入っていないのは、実物を裁つ時に教師または家の人が一緒

に裁ったので誤りの結果ははぶいた。

4. テストの結果

	誤りの人数
裁ち方	7名
縫い方	42名

ペーパーテストなので、しるしつけは大きな誤りしかわからないので

誤りの結果ははぶいた。

(2) 1. 誤りの変化

上の各結果を誤りの度合いによって、大きい誤り・誤り・軽い誤りの三段階に分け、1人が誤りをいくつおとした場合は大きい誤りのほうを取り、まとめてみると次表のようになった。

		紙布	実物	テスト	増減
裁ち方	大きい誤り	5名	/	7名	+ 2名
	誤り	5名		0名	- 5名
	軽い誤り	0名		0名	± 0名

紙布の大きい誤りの5名

そで4枚 2名

わからない 1名

おくみの丈が短い 3名

テストの大きい誤りの7名

おくみ1枚 2名

おくみなし 2名

みごろ1枚 1名

そで4枚 1名

そで1枚 1名

		紙布	実物	テスト	増減
しるしつけ	大きい誤り	1名	2名	/	+ 1名
	誤り	4名	15名		+ 11名
	軽い誤り	2名	8名		+ 6名

紙布の大きい誤りの1名

わきの方へおくみつけのしるしをした 1名

実物の大きい誤りの2名

おくみの斜がなく前幅をそのまま上まで 2名
誤りのところで15名も出たのは、おくみつけの時
おくみの丈を実測するのにすその縫代を入れたり
入れなかったりしたため誤りの人数が多い。

		紙布	実物	テスト	増減
縫い方	大きい誤り		14名	1名	-13名
	誤り		18名	40名	+22名
	軽い誤り		6名	1名	-4名

実物の大きい誤りの14名

えり下まつりぐけ 1名

おくみつけ真直ぐ上まで 1名

そで下袋縫いなし 1名

そでつけのばしたまま 1名

左右同じそで 4名

三つえりしん反対側 2名

そでつけの時みごろの山を反対に0.5入れた2名

わきの折り反対 2名

テストの大きい誤りの1名

背縫い耳ぐけ 1名

2. 裁ち方についての誤りの変化

	誤→誤	正→誤	誤→正	正→正
大きい誤り	1名	6名	4名	28名
誤り	0名	0名	5名	
軽い誤り	0名	0名	0名	

正→誤の大きい誤りの6名

そで4枚 1名

全然出来ない 2名

おくみ1枚 1名

おくみなし 3名

誤→誤の大きい誤りの1名

そで4枚 1名

この者は紙布の時と同じ誤りをくり返した

3. しるしつけについての誤りの変化

	誤→誤	正→誤	誤→正	正→正
大きい誤り	1名	1名	0名	18名
誤り	3名	12名	1名	
軽い誤り	2名	6名	0名	

正→誤の大きい誤りの1名

ふりの方に丸みをつけた 1名

正→誤の誤りの12名

きせをわすれた 10名

かけえりの丈をまちがえた 2名

4. 縫い方についての誤りの変化

	誤→誤	正→誤	誤→正	正→正
大きい誤り		0名	1名	0名
誤り	別表	6名	1名	
軽い誤り		0名	0名	

正→誤の誤りの6名

背縫いの折り反対 1名

おくみの仕来上まで 1名

肩当の仕来まつりぐけ 2名

わきの中とじなし 1名

わきの中とじ反対 1名

別表 誤→誤の内容

大きい誤り	→ 大きい誤り	1名
	→ 誤り	12名
	→ 軽い誤り	0名
誤り	→ 大きい誤り	0名
	→ 誤り	16名
	→ 軽い誤り	1名
軽い誤り	→ 大きい誤り	0名
	→ 誤り	6名
	→ 軽い誤り	0名

5. 1人がおとした誤りの数

大きい誤りの回数	人数	誤りの回数	人数	軽い誤りの回数	人数
4回	2名	11回	1名	6回	1名
3回	1名	10回	2名	5回	0名
2回	3名	9回	0名	4回	2名
1回	14名	8回	4名	3回	4名
		7回	1名	2回	10名
		6回	2名	1回	13名
		5回	8名		
		4回	8名		
		3回	8名		
		2回	4名		
		1回	6名		

大きい誤りと誤りを1人でおとした数

回数	人数
15回	1名

一番多い者は15回も誤ちをしている。そのために時間も他の生徒より6時間も多

11回	1名
10回	3名
9回	0名
8回	3名
7回	4名
6回	4名
5回	8名
4回	5名
3回	5名
2回	5名
1回	5名

く、家でしたり学校で残ってしたりしてやっと出来た。

まちがえたり、実際の時は出来ていてもテストになるとどこをどの方法で縫ったのかわからなくなってしまった。この者達は基礎的な理解が出来ていないために誤りをおかしてしまったのではないかと思う。このように最初の誤りをくり返したのも、始め正しかったのに後で誤った者の中には、実際の時には教師、となりの人に聞いたので正しく出来ていたが、テストになるとわからなかったと答えたものが大半いた。この結果紙布や部分縫いでなく来年は $\frac{1}{4}$ 位のひな型を始めに作らせたら誤りはもっと少なくなるのではないかと思われる。

後で生徒の感想をまとめてみると、2人組でしたのは誤りが早くわかりよかったが、仲の良い者の所へ聞きに行く事が多いので仲よしで組にしてくれたらもっとよいと答えたものが多かった。始めはきらいであったが、出来あがったらすきになったと答えたものが15名もいた。二度と縫わないと答えたもの3名、この3名はむつかしくてどうしてもいやだ、すきになれないとのべている。

IV まとめ

以上の結果からみると縫い方における場合に誤りが一番多く、裁ち方における場合が一番少い。部分縫いそのものはわかっているにもかかわらず実際に縫う時、縫う箇所を